社会的ジレンマ (SD) の解決法として、サンクショニング・システムを用いたものがある。しかし、２次的ジレンマが生じてしまい、人は十分に罰を行使しなくなる(Axelrod, 1986)。ところが、現実にはサンクショニング・システムによって、解決されている場合が多い(Ostrom, 1990)。なぜなのだろうか。本研究では、サンクショニング・システムがない状況では非協力するが、ある状況では協力する個人が、罰を高く予測することで、SD において協力していると説明する。本研究では、彼らがこのような傾向を持っているということと、なぜこのような傾向が生じるのかということを実験で検証した。実験の概要はまずサンクショニング・システムがないＳＤとあるＳＤを 108 人の参加者に行わせ、その後、他の協力者がどのくらい罰するかということを予想させた。結果からは、上記のように協力した個人が罰を高く予想していることが分かった。

キーワード
社会的ジレンマ　罰　協力　２次的ジレンマ　サンクショニング・システム